

# 埋文

## とやま

Toyama Prefectural Center for Archaeological Operations

2019.12.27

VOL

149



小竹貝塚出土品(富山市呉羽)  
《針》

動物の骨角を利用して作られた針です。写真に掲載されている針は有孔のものですが、無孔のものも小竹貝塚から出土しています。一点一点どれを見ても、針先の鋭利さや孔の形など、細部に至るまで精工に加工されており、当時の技術の高さをうかがえます。

とっておき埋文講座 ● 特別展「HYOUSHIKI 標式土器」—私たち研究者の縄文時代の編み上げ方—

● 「富山県の縄文土器編年」

埋文あらかると ● 富山の歴史出張プロジェクト

Center Flash ● とやま埋文友の会の活動・特別展「HYOUSHIKI 標式土器」第II期展のみどころ

古写真発掘! ● 中山南遺跡(県指定史跡) 射水市黒河・黒河新

富山県埋蔵文化財センター

# 特別展「HYOUSHIKI 標式土器」

とっておき埋文講座①

## 「令和」はじめの特別展

新元号「令和」となってはじめての特別展は縄文土器をテーマにした展示です。縄文時代は草創期・早期・前期・中期・後期・晩期の6期に分けられ、第Ⅰ期では早期・前期・中期、第Ⅱ期では中期・後期・晩期の土器を展示しています。

## 標式土器とは？

約16,500年前ともいわれる大平山元Ⅰ遺跡（青森県）の縄文土器以降、1万年以上にわたって、様々な形・文様の縄文土器が作られました。考古学者はそれらを分類し、文様などの特徴から「型式」を設定し、土器の変遷を研究してきました（編年）。富山県では30以上の型式が設定されていますが、今回はわかりやすく「様式」（広義の型式）ごとに土器を展示しています。

標題の「標式土器」は考古学で一般的な用語ではありません。形や文様に様式・型式の特徴が顕れ、土器の事典などにも頻繁に登場する、その様式・型式を代表する土器を今回の展示では「標式土器」と呼ぶこととします。

## 大きな縄文土器

展示室に入って目の前にある土器は、縄文中期でも比較的大きな縄文土器です。特に中央の土器の高さは70cmを越え、現時点では県内で最も大きいとされます。布尻遺跡（富山市）で出土したものです。



大きな縄文土器

## 縄文時代早期・前期の土器

### ●桜峠様式（早期中葉）

富山県でまとまった量の土器が出土するのは早期以降です。押型文と呼ばれる、丸い木の棒に楕円やギザギザ線を彫った道具を使って施文しています。



桜峠様式

### ●極楽寺様式（早期末～前期初）

貝殻などで表面を擦った「条痕文」と縄を表面に転がした「縄文」からなる型式です。土に植物繊維を混ぜたものが多く、ドングリを練り込んだ痕跡が残る破片も見つかっています。



極楽寺様式

### ●朝日C様式（前期中葉）

東の黒浜式と西の北白川下層式の影響を受けた土器で、中空の植物茎を半分に割った「半截竹管<sup>はんざい</sup>」で施文するのが特徴です。「平行線」や「コンパス文」があります。



朝日C様式

### ●蛭ヶ森様式（前期後葉）

口縁部に粘土紐を貼り付けたり、シワ状に文様を付けたりしたシンプルな土器です。



蛭ヶ森様式

### ●福浦上層様式（前期末）

細い粘土紐を半截竹管で押さえつける「結節浮線」や半截竹管を強く引いて少し盛り上がった線をつける「半隆起線」で施文するのが特徴です。



福浦上層様式

## 縄文時代中期の土器

### ● 葺照寺様式（中期前葉）

口縁部と胴部にわけて文様を施し、「半隆起線」を引き並べた土器です。「格子目」や「木目状撚糸文」などが特徴的な新保式と「蓮華文」が特徴的な葺照寺式の2型式からなります。



葺照寺様式

### ● 天神山様式（中期中葉）

粘土紐を貼った「渦巻文」を中心に、半截竹管の「半隆起線」をすき間なく施文した土器です。渦巻文や半隆起線などの違いから天神山式・古府式・古串田新式に分けられています。



天神山様式

### ● 串田新様式（中期後葉）

大きく波打つ「波状口縁」が特徴

的な串田新式と「沈線」や細い「突線文」が特徴的な前田・岩嶺野式からなります。



串田新様式

## 小杉高校発掘資料

昭和24年（1949）に県立小杉高校地歴班の学生が、串田新遺跡（射水市）を発掘調査した際に出土した土器です。東京大学の山内清男氏の助言を基に、この土器片から「串田新式」という型式が設定されました。富山県の考古学の歴史上、重要な遺物です。

## 多様な器種

考古学者が型式を決める際の基準となるのは、「深鉢」と呼ばれる背の高い土器です。そのほかにも、「浅鉢」「台付鉢」「有孔罎付土器」など様々な器種（形式）が存在し、共通する文様が見られる場合もあります。ここでは、朝日町境A遺跡から出土した重要文化財「富山県境A遺跡出土品」のうち、主な器種や一風変わった形の土器を展示しています。



富山県境A遺跡出土品

## SNS映え!?円形土器劇場

最後を飾るのは「円形土器劇場」です。ここだけで19遺跡83点の縄文土器を並べています。ガラスがないので、土器を間近で観察できます。

さらに、スマートフォンの機能を使ったパノラマ撮影やSNSパネルなどを使った写真撮影も可能です。土器の中には造花を入れ、SNS映えを意識しました。普通の博物館では中々できない工夫を凝らした展示で、来館者の方に好評をいただいています。ぜひSNSにアップしてみてください。

## お楽しみコーナーもあります!

土器パズルや土器あてクイズも用意しています。土器あてクイズは、文様の拡大写真からどの土器か推理するもので、初級・中級・上級の3種類あります。難しそうに見える問題も、写真にヒントが隠れています。ぜひ親子、友達で相談しながらチャレンジしてください! 全問正解するといことがあるかも…。

(松井広信)



スマートフォンを利用した円形土器劇場のパノラマ写真

# 富山県の縄文土器編年

とっておき埋文講座②

富山県教育委員会生涯学習・文化財室 主幹 島田 修一

## はじめに 編年とは

「編年(英訳:chronology)」とは、あまり馴染みの無い用語ですが、まさに字のごとく年代を編むことです。

通常、この言葉が使われるのは、考古学の分野がほとんどだと思います。考古学では、遺構や遺物の新旧関係や年代を秩序立てて配列する作業のことを「編年」と呼んでいます。

編年は、考古学研究に不可欠な秩序ある時間軸の指標です。時代が新しくなると文字や写真、絵画など様々な史料がありますが、こうした記録資料がない先史考古学では、出土品をもとに「いつ、どこで」の基準づくり、歴史的な時間の設定を行う編年研究そのものが、重要な基礎研究となっています。

## 層位学的研究と型式学的研究

考古学における年代には、相対年代と絶対年代の2つの年代があります。相対年代とは、資料AとBでは「AがBより古い」というように相対的な新旧関係で表される年代です。一方、絶対年代とは、「今から3,000年前」などと具体的な数値で表される年代です。

考古学では遺構や遺物の年代を検討し、決定する場合に相対年代を基本としています。この相対年代を決定するために、層位学的研究と型式学的研究の二つの方法が用いられています。

年代を検討する場合、まず、層位学的研究がベースとなります。層位学的研究とは、遺物を含む地層の上下関係や新旧関係、遺構の切り合い(重複)関係等によって遺物の年代の新旧関係を決定する方法で、遺物を含む地層が攪乱を受けずに上下に重なって堆積している場合は、下層が古く、上層が新しいという地質学の「地層累重の法則」に基づくものです。

一方、型式学的研究とは、考古資料を分類して「型式」と呼ばれるグループを設定し、その型式を一定の原理に従って年代的に配列する方法で、生物学の考え方、ダーウィンの進化論や痕跡器官の概念を援用した研究方法です。

考古学に置き換えて考えると、土器など人類が作り続け、使い続けた道具は、長い間に必ず形態や装飾が一定の方向性をもって変化を遂げていくことに着目して、そうした道具(遺物)の変化の正しい序列を見定めることによって、遺物の時期差、つまり時代の変遷を探るための基準をつくるという考古学の基礎的な研究法です。要するに、一定の方向性をもって変化していく道具の形態や文様の特徴によってグループ分けを行い、そのグループごとに時間差を設定しているというものです。

ここで、皆さんよくご存じの新幹線を事例にモノの変化のあり方を見てみましょう。例えば、東海道新幹線は一番古い0系から最新の700系まで数十年ごとに形や模様を変えていっていますが、誰もが東海道新幹線に共通して抱く形や白と青を基調にした模様は、ずっと受け継がれています。

一方、上越・北陸新幹線も200系から2階建てのE系へと変化し、今では北陸新幹線E7系となっています。一つ一つ形も色も違うのですが、変化の方向性に共通したつながりが見えてきます。ここで言う、例えば100系とかE系というのが一つの型式にあたり、東海道新幹線とか上越・北陸新幹線が、系統を別にする、共通した雰囲気をもった複数の型式群



のまとまりとなります。(この大きなまとまりを様式と呼ぶ研究者もあります。)

こうした型式ごとの系統的な変化のあり方を追求して、年代的な序列を定めていこうというのが、型式学的研究です。考古学における土器型式の研究実践では、たくさんの土器群から、まず形の共通するものを選別してグループ化します。次いで、各グループ内で共通する文様を持つものを抽出して、形と文様の組合せによるグループを作ります。このグループごとの系統的な変化を、層位学的な考え方も合わせて年代的な新旧関係の判断や、変遷のあり方の検討を繰り返し、時間軸を編み上げていく作業を行っています。

## 縄文土器の型式設定のポイント

縄文土器は基本的に煮炊き用の容器と考えられています。煮炊き用の器であるにもかかわらず、複雑な形をしていて、使用するにはかえって邪魔になる華やかな装飾、文様が描かれています。けれども、それを手がかりに私たちは、型式学的研究を用いて縄文土器の移り変わりを詳細に探ることができます。

縄文土器の編年は、先にお話したとおり、形や文様の組み合わせ、器種の構成や製作技術、文様などの特徴を捉えて細かく分類・グループ化したものを配列していく作業です。遺跡や地域ごとに年代的な序列を編成し、編年表にまとめることで、その地域の縄文土器の推移や時代区分を明らかにすることができます。ただし、注意が必要なのは、編年表はあくまで型式の移り変わりを基準にした研究者の便宜的な年代区分であって、文化的変化を表す指標ではないということです。

では、型式設定の考え方、そのポイントについて見てみましょう。実際に発掘調査等で発見される土器は、ほとんどがバラバラに壊れた破片の状態です。接

合・復元を行っても、ひとつの遺跡の出土品だけで全容を知り得る個体は、さほど多くはありません。そこで、別の遺跡で出土した共通する特徴を持つ土器群を含めて「この土器はこんな形でこんな文様に違いない」という想定をもとに理論的に全体像を復元し、比較・検討していく必要があります。

ここで大切なのが、資料の選択です。発掘調査では、遺跡全体を覆う土砂や、住居跡などの中から膨大な数の土器が出土しますが、型式設定の要となるのは、竪穴住居の炉内に敷き詰められたり、意識的に地中に埋設され、棺として利用されたと考えられる、まさにその住居や墓が利用された年代を端的に示す土器群です。これらを一括資料として特定・抽出することが重要です。

次のポイントは、土器の形や文様の意匠や施文手法などの系統的な変化の方向性を正しく捉えることです。縄文土器の文様に見られる特徴は、時期や地域ごとに共通し、比較的短期間（と言っても数十年から100年の幅はありますが）のうちに変化していきます。その変化の方向性は、そのグループ（型式）を特徴づける意匠が、発生し、盛行し、やがては衰退していく傾向にあります。これは、縄文前期や中期といった時期や、地域を問わず、縄文時代全般を通じた全国的な傾向です。この点に着目して、個々の土器や型式の年代的な新旧関係を捉えていくことが大切です。

さらに、在地の土器群に混ざって出土する他地域の特徴を備えた土器（搬入土器）の存在や、在地の土器との形や文様の交合から、他地域の型式と同時代性の比較、検討を進めることも必要です。

## 北陸・富山県の土器編年

縄文時代のはじまりはいつから？については、研究者の間で意見がわかれますが、少なくとも1万年以上にわたる縄文時代の土器編年は、こうした層位学・型式学的な研究法を駆使して、戦前に「縄文学の父」と称される山内清男先生を中心（やまのうちのすが お）に飛躍的に研究が推進しました。山内先生は、1937年に縄文時代を早期から晩期までの5期に区分した全国的な編年表を発表され、戦後に草創期も含めた6期に改編されました。この編

年表は、研究が大きく進展し、全国の縄文土器が約300型式にまで細分されている現在においても、その大枠は変わっていません。

富山県の縄文土器編年は、1950年代に、山内清男先生の指導の下で、石川県の高堀勝喜氏や富山県の湊農氏ら地元（たかぼりかつ き みねとしん）の考古学会の研究者が枠組みを作りあげました。1970年代に入ってから地方自治体の行政関係者による発掘調査の成果に基づいて、その中身を充実させるかたちで今日まで研究が進められ、富山県では、早期の極楽寺式に始まり、前期の蛭ヶ森式、朝日下層式、中期の厳照寺式、天神山式、串田新式、後期の井口式から晩期の下野式に至るまで、約30型式にまで細分化が進んでいます。

富山県における縄文土器型式の変遷、特徴を概観すると次のとおりです。

- ①**草創期** 白岩尾掛遺跡出土の小破片のみのため、詳細は不明。条痕文系、爪型文系土器の存在から、どちらかといえば東日本地域の影響が強い
- ②**早期** 押型文系土器の存在が、西日本文化の影響、広がりを示す
- ③**前期** 再び関東・東北地域の影響を受けた土器群が広く分布し、東西文化が混交。羽状縄文、木目状捺糸文など多彩な縄文や、細線文、浮線文が発達
- ④**中期** 物語性のある華美で装飾的な形態・文様が発達。東日本、西日本のどちらでもない独自性が開花
- ⑤**後期** 全国的に状況が一変。豪華な土器は姿を消し、沈線文を主体とした土器に変化。前半は関東地方、後半は県西部が西日本、県東部は東日本の影響を受けた土器群が広範囲に分布
- ⑥**晩期** 一般的に東北地方の亀ヶ岡式土器の影響が強いが、後半には九州の突帯土器の影響が及ぶ

このように、富山県は、縄文時代からまさに東西文化の交流点だったことがよくわかります。



天神山式土器（縄文中期）  
（重要文化財：境A遺跡出土品）

## 型式学研究の課題と可能性

縄文土器の型式学というのは、土器の系統的な変化を捉えて時間軸を定めるものなのですが、その変化の要因、すなわち、集団や文化の不連続の原因は、型式学では解明することはできません。

また、最近では自然科学の発達で詳細に土器の実年代（絶対年代）を測定することができるようになってきました。これにより、一型式ごとの時間幅にかなり差があることや、これまで同時期と考えられていた他地域の型式との間にズレ（時期差）があることが分かってきました。この食い違いをどのように是正して広域的な編年を確立していくのが課題となっています。

逆に言えば、考古学が100年以上をかけて編成してきた縄文土器編年と、理化学的な年代測定値をマッチングすることによって相互検証を行い、世界でも例をみない先史考古学の緻密な時間軸を完成することができます。

## おわりに

展示会などで縄文土器の説明を見たり聞いたりすると、必ず「〇〇式」という土器の型式に行き当たります。一般の考古学ファンの皆さんにとって、この土器型式は、難しく、とっつきにくいものだと思います。けれども、縄文文化を探るための重要な手がかり、いわばパスポートのようなものです。型式がもつ奥深さ、その意味を知ると縄文土器の見方がぐっと広がるはずですよ。

そもそも土器型式は、考古学に携わる人間が、自身の視点で理論的な時間軸の物差しを設定したものです。ですから、〇〇式土器に正解はありません。私がある土器群をA式と言っても、皆さんはB式と考えて構わないのです。

縄文土器の形や文様の美しさ、豪華さに心惹かれるだけでなく、一歩進んで考古学的な見方を学んで各地の遺跡や土器を見学してみると、さらに、興味が湧いて考古学の楽しさが増してくると思います。ぜひ、皆さん自身のパスポートを手にして、縄文文化の魅力をより深く学んでみてください。

（令和元年11月10日 第4回 県民考古学講座）

# 埋文あらかると

富山の歴史出張プロジェクト

出張埋文センター



## 出張埋文センターとは

当センターでは、春夏の企画展や秋冬の特別展、「県民考古学講座」、児童を対象とした「わくわく古代チャレンジ」等を開催し、広く県民の皆様に考古学に触れる機会を提供しています。しかし、なかなか当センターまで足を運ぶことができない方々もたくさんいます。

そこで、遠方等の理由で当センターに来館できない県民の要望に応えるのが「富山の歴史出張プロジェクト(出張埋文センター)」。

市町村教育委員会と連携し、地域の遺跡からの出土品を中心に地元住民の方々に広く公開し、ふるさとの歴史や埋蔵文化財への関心をもってもらうことを目的としています。

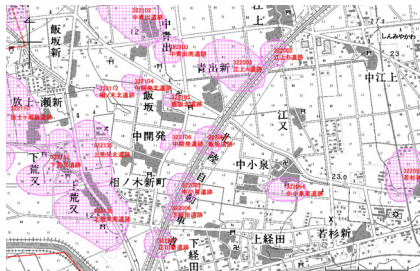
## 令和最初の 富山の歴史出張プロジェクト

11月6日(水)に上市町宮川公民館において、「富山の歴史出張プロジェクト・上市」と題して開催しました。



会場の様子

宮川公民館の近くを通る北陸自動車道の建設にあたり、1979年に弥生時代後期の集落遺跡である「江上A遺跡」をはじめ、いくつもの遺跡の発掘調査が行われました。



上市町宮川地区周辺の遺跡地図

このため、地元の希望もあり、江上A遺跡の出土品を中心に、弥生時代の土器や木製品、銅鏡などを展示し、出土品解説や土器づくり等を行いました。

## ●「遺跡・出土品解説」



普段目にしない遺跡や出土品はけっして馴染み深いものとは言えません。しかし、それらをもっと身近に感じ、興味関心をもってもらうことができるのが、この「出張埋文センター」です。土器等の出土品や地図等、実物を提示しながら分かりやすくガイダンスを行いました。



まず、富山県には約4,200もの遺跡があり、地元の江上地区や中小泉地区等、公民館周辺にも数多くの遺跡があることを写真や地図を示しながら説明しました。また、等尺年表を使い、江上A遺跡の人々が暮らしていた弥生時代は今からどれくらい昔の時代なのかを捉えられるようにしました。

次の出土品解説では、地元で発掘された土器や木製品の農具、銅鏡、コメやモモの種等を見せながら、弥生時代の生活について説明しました。出土品を通して弥生時代の人々の生活の様子がイメージをもつことができたようです。

## ●「出土品に触れる体験」



土器や木製品、銅鏡、食べ物等、実際に出土品に触れながら観察する体験を行いました。普段博物館等で展示ケース内に展示され、触ることのできないはずの出土品が手に取り間近で観察できるのも、この「出張埋文センター」ならではの特権。参加者は実際に触れることができたことに感激していました。

## ●「土器づくり」



一人一人が自分だけのオリジナル土器をつくる体験をしました。

既存のイメージに捕らわれず、自由な発想で形や模様を決めてつくりました。

世界に一つしかない自分だけの作品に仕上がりに、参加者は大変満足していました。

## おわりに

当センターでは、「出張埋文センター」に限らず、通年で出前授業を行い、様々な場面で学習支援を行っています。

学校での歴史学習だけでなく、PTA親子活動や公民館や児童クラブ行事等にも対応できます。また、今回紹介した以外の活動メニューもあります。興味がありましたら、お気軽に当センターへお問合せください。ぜひ、お待ちしております。

(小嶋 剛)

## とやま埋文友の会の活動

埋蔵文化財センターでは、埋蔵文化財をととして郷土の歴史や文化への理解を深めるために「埋文友の会」を設立し、平成16年4月から活動しています。令和2年度の会員募集は3月頃から募集を始めます。埋蔵文化財について興味のある方、知識を広めたい方、奮ってご入会下さい。



### 主な活動

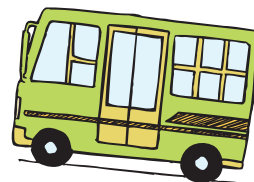
#### 1 当センターが行う展示や普及事業の案内が届きます。

- 特別展・企画展の開催案内、講座、展示解説会などの案内
- 特別展図録、広報誌「埋文とやま」4回、会報の配布



#### 2 遺跡探訪バスツアー（年1回秋、参加費別途）

秋には「研修旅行」を行います。今年度は福井県の「福井県年縞博物館」と「若狭三方縄文博物館」に行き、若狭の縄文文化や最新の研究を学びました。



**会費** 年額1,000円(年度途中の入会でも会費は同額となります。)

**会員の期間** 当該年度の4月1日もしくは入会の日から翌年3月末まで

**問い合わせ** 富山県埋蔵文化財センター友の会担当まで  
(電話：076-434-2814)

### 特別展「HYOUSHIKI 標式土器」第Ⅱ期展のみどころ

第Ⅱ期展にあわせて展示品の入れ替えを行います。第Ⅰ期展で早期～前期の土器を展示していたコーナーに、後期～晩期の土器を展示します。第Ⅰ期展をご覧になった方もぜひご来場ください。

第Ⅱ期展で新たに展示する型式・遺跡

- ・ 気屋式(境A遺跡、五百歩遺跡)
- ・ 井口式(井口遺跡)
- ・ 八日市新保式(野沢狐幅遺跡、金剛新遺跡、布尻遺跡)
- ・ 御経塚式(桜町遺跡、中山中遺跡、布尻遺跡)
- ・ 中屋式(桜町遺跡、井口本江遺跡)
- ・ 下野式(井口本江遺跡、下老子笹川遺跡)

会期 / 令和2年1月6日(月)～3月8日(日)

写真：八日市新保式(富山市布尻遺跡出土)



# 古写真発掘!—《3》



## 中山南遺跡(県指定史跡)

昭和38年(1963年)調査 射水市黒河・黒河新

今回の古写真は、県指定史跡「中山南遺跡」の発掘調査の風景です。

中山南遺跡は、旧小杉町の太閤山住宅団地造成に伴い発掘調査が行われました。写真は昭和38年の調査風景ですが、この後、調査は昭和43年(1968年)まで続きました。

当時は、県に専門の職員がいなかったため、富山考古学会と小杉町・富山市・高岡市の高校の地歴クラブの生徒たちが参加して発掘調査を行いました。

1枚目の写真は、2号住居跡とされる遺構を前にして調査の成果を参加した高校生たちが聞いているところでしょうか。

2枚目の写真は、学生帽をかぶっていることから、高校生が発掘をしている風景と思われる。

中山南遺跡の一部は、古墳時代初頭の集落や土器を研究するうえで重要な遺跡として昭和50年(1975年)に県の史跡に指定されました。現在は、住宅団地内の史跡公園として市民の皆さんに親しまれています。



### 編集後記

開催中の特別展では、SNS映えのする「円形土器劇場」やタッチパネル式「土器パズル」など、身近で土器に親しめる内容となっています。ぜひ、ご来館をお待ちしております。(担当 小嶋)

### 富山県埋蔵文化財センターニュース「埋文とやま」VOL.149

令和元年12月27日発行 編集／富山県埋蔵文化財センター 〒930-0115 富山市茶屋町206-3 TEL076-434-2814  
URL <http://www.pref.toyama.jp/branches/3041/maibun/>



この印刷物は、印刷用の紙へリサイクルできます。

